

中世城址の地形図による表示

籠瀬良明

私の関心

ここで城だけにしぼっても、人それぞれに異なる視点があろう。私にとって関心が強いのはまず平野の城址、特に自然堤防などの微高地に立地する城である。構築物では中世の塁と堀。調査法および結果の表示では大縮尺地形図に期待することが大きい。

1) 城の位置には平野から山地までさまざまな違いがあるが、中世城館の多くは、当時の集落の近似的位置と考える立場から、より強く平野の城址に心をひかれる。そこに米麦を主とする安定した食糧、生産力があると考えるからである。

2) 生産力に加えて防御力にも視点を置いて平城・平山城・山城に、あるいは地形用語に従って平地の城、台地端の城その他が挙げられる。平地の城からは自然堤防、またはそれに近い比高の低台地などを含めた微高地の城を区別することもできる。埼玉平野などの微高地には、田畑に取巻かれた中世城址が数多く発見される。

3) 土塁と空堀は、中世城址に付随する極めて顕著な視覚対象であるが、昨今急速に増している発掘による地下の知見はより重要である。

4) 城には大きく見ても古代・中世・近世の城という区別はあるが、以上に挙げたような視点から、まず中世の城館に関心が持たれるのである。また西日本の点在する古代の山城、それとの関連で、あるいは城壁の形から朝鮮半島¹⁾、沖縄²⁾あるいは西ヨーロッパ³⁾の城壁にも心ひかれる側面がある。

5) 城址の調査研究には文献史料や伝承を活用すること、埋没されている地中の秘密を掘り出すことは最重要の仕事である。しかし私に多

少できそうなのは地形図、わけても大縮尺地形図の収集利用と、それらを活用しての現地踏査である。その他の各種地図や空中写真もまた有力な武器であることはいうまでもない。

6) 調査結果の表示には、文章、スケッチ、図表、地上写真、空中写真などがあり、それぞれ有力である。しかし私は調査研究の場合と同じく今後も地形図にこだわりたい。

以下、中世城址の調査研究に際し、さらにその結果の記載表示の手段として地図特に地形図がどのように活用されているかの現状を、紙面の許す範囲内で具体的に述べる。記述には現状に先行する二つの段階を設定して略記する。

I 城址の経始 とくに土塁・堀などを素描図で表示した段階

この段階は戦前において典型的であったが、その延長は今日に及んでいる。調査目標は、城館位置の確定であり、郷土誌、伝承を手掛りに進められ、その成果は○○地方城館分布図となった。多くは小型紙印刷の小縮尺地図であるから、城館密度の概略はつかめても、その分布図

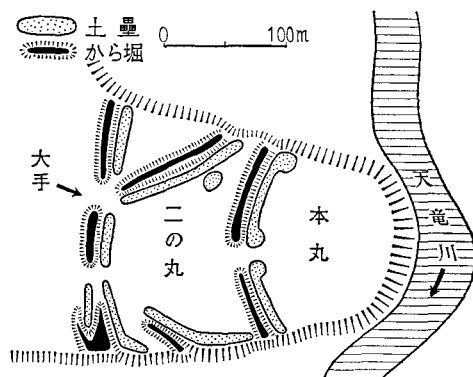


図1 見取図の例 長野県下伊那郡松川町台(大島)城 1938年10月 籠瀬作成

を頼りに現地へ到達するのは難しい。

この段階で地図が大きく貢献するのは、城館位置の検索に際し、図上の地名が利用できた場合であり、記録や伝承に城址の地形環境が含まれている場合である。地形図から城名や城記号が見つければ最高である。

6) 城址調査の一応のゴールは城地平面図の作製で、その内容は主として土塁・堀の配置であるが、目で確認できる部分を手掛りとして未確定部分、推定部分を加えるなどして図示は終了する。土塁の形は1:1万はもちろん、1:2.5万、1:5万の地形図に描かれていて、調査と表示を容易にする場合も少なくない。それらの地形図を参考にしながら、新編武蔵国風土記稿の記事に従って、城址を確認する作業を進めたことがあるが、^{7), 8)} それには極めて有力な指針があった。一高史談会(1923年)『史蹟を探る人々に』(黎明社)で、小冊子ではあるが優れた内容である。ただし地形図の利用は十分とはいえない。戦前における中世城址の研究段階を最もよく示す成果は、鳥羽正雄ら(1936年)『日本城郭史』に含まれている。昭和40年代に入って発行された『日本城郭全集』16巻(1966~1968年)(人物往来社)は、この段階の調査方法並びに調査の成果を具体的に知るのに役立つ。

II 城址の細部を計測または大縮尺地形図に記入して表示した段階

この段階はおおむね昭和30年代から進行し、その盛行期は今日に及んでいる。私が見るところ、この段階の創始者あるいは最も有力な実行者は小室栄一である。小室は早くも昭和20年代から30年代初頭、自らの手で関東一円にわたる中世城址を実地に測量するという難事をなした。小室は「イギリス中世城郭史に関心を持ち、最初の問題をヨーロッパ封建城郭の初期形式であるモット城郭(Motte Castle)に求めている。しかし、時として私は、それが日本にいる私にどのような意味があるのであろうか、という迷いを感じていたのである。そして、私の城郭研究の原体験ともいうべきものを、そのモッ

ト城郭と築城資材や、その他の諸点で相通ずるものがあると思われた。わが国の中世城館の踏査から、例え蓋然的にしる初期城郭に対する認識らしきものを得ようとしたのであった。つまり文献を介した外国城郭の研究⁹⁾だけでは受け取れないものを、そこに感得しようとし⁹⁾て、日本の中世城郭をつぎつぎに計測していったのである。しかし専門は西洋史学であり、いまま明治大学で学生指導に打ち込む史学者である。まず「研究の経過に於いて大類伸先生におかれては終始暖かい御教示と御指導を賜わった」と記すとともに、それに続けて、岡山俊雄氏から地理学・地形学について起こった疑問の解明を得られたと書かれている。

以上の記述でわかるように、小室は史学に足をおきつつ、対岸の地理周辺へ双手をさしのべ、城館址の精密測定を主軸とする高度の城郭誌を完成するという、先人未踏の学際研究を推進し、^{9)~14)} 多くの研究業績を世に出したのである。

小室によって中世城郭址が精力的に調査測定されるのより一步遅れて、国並びに各種自治体などから、1:2,500または1:3,000の精密な地形図の発行が徐々に始まる。建設省は昭和30年代初頭から、つづいて国土地理院も国土基本図の発行を始める。しかし前者は重要河川の河川敷のみを、後者は埼玉県の一部を昭和36年に発行するのである。そのような大縮尺地形図のもたらした利益を3つ挙げることができる。その第一は踏査による結果を容易に地図化し得ること、第二は城地の地形環境を正確かつ能率的につかむのに役立つことである。

第三は、時には地形図から土塁・堀などが読みとれる場合である。この場合にも土塁・堀が単なる「けば」で表現されているものもあるが、ごく稀には等高線で表わされて、土塁の高さや堀の深さが数量まで読みとれるものがある。鬼怒川左岸にある飛山城¹⁵⁾はその好例である。飛山城の土塁・堀が宇都宮市役所発行の一般図に、これほど明瞭に表われたのはこの土地利用が林地であるためである。畑地では耕地面積をふやすために、水田では灌漑のためもある土塁

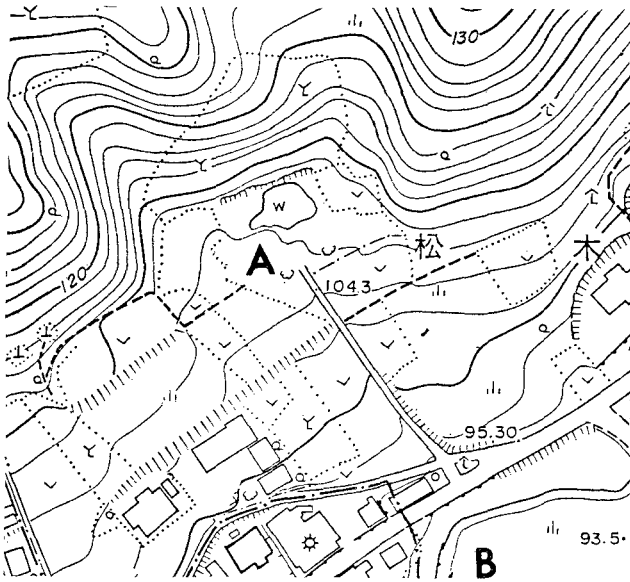


図2 斜面の城 A付近：井草屋敷 B：沖積平野
1：2,500 東京都地形図40-4

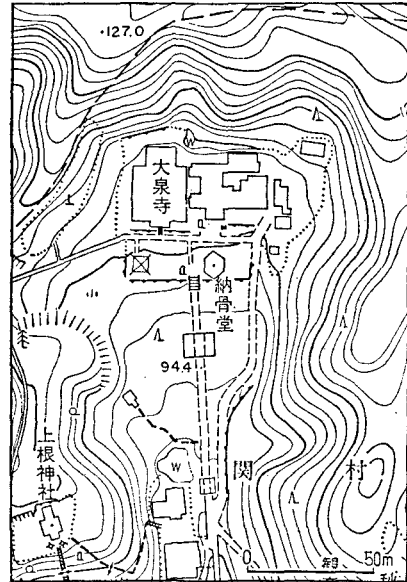


図3 谷戸の城の例 小山田城址
東京都1：2,500「上山田」

は崩され、堀は埋められ易い。林地であり続けたのは、水を引くのには不利な台地であったためでもある。台地とくに急崖を持つ台地端の林地に中世城址が原型をとどめている実例は少なく、それが大縮尺地形図はもとより1：5万地形図にも描かれている。大縮尺地形図は台地城址の形態を最も良く表現しているといつてよいであろう。台地城址の検索にとって大縮尺地形図の威力は極めて大きい。これに反して耕地、とくに水田利用の低地では、土塁・堀を大縮尺地形図の等高線や、土地の凹凸を示すだけから直接読みとれる場合はほとんどない。扇状地や山脚緩斜面の城址では、会津盆地西部の新宮城（喜多方市慶徳寺字新宮、1：2.5万図喜多方西部）、多摩丘陵内の井草屋敷（八王子市松木1044番地）でみるように、1：2,500地形図は他の資料を重ねることによって、その表現力を発揮する（図2）。谷戸の¹⁶⁾城についてもほぼ同様である（図3）。山城では急斜面が崩壊により変形していることが多いし、樹高の不揃いな密林に覆われていれば、例え土塁・堀などが残っていたとしても、その形を等高線から読みとれるような地形図は少ない。

城址表示の主流に、大縮尺の精密な地形図が登場し、広く普及したことが、この段階における顕著な特色となっている。そしてこの段階の城址調査の成果を、ほとんどトータルな形で、かつ大縮尺地形図の利用現況を十二分に見せてくれる出版物として、平井聖・村井益男・村田修三編『日本城郭大系』全20巻（1979～1981年）がある。ただし都道府県間に出来不出来の差はある。

III 城址の発掘・計測と超大縮尺地形図による表示の向上^{17)~25)}（その一）

城址発掘・調査は、いわゆる歴史ブームの進行、各種規模の土地改変などに基因する史蹟保護行政との関連で急激に進んでいる。城郭史学の新進学者西ヶ谷恭弘の場合でみると、文献史学の本領を十分に発揮するとともに、歴史考古学の手法を駆使して研究成果を前進させている。一般的にみると、前の段階にスタートし現在も盛んな1：5,000、1：2,500、1：1,000などの大縮尺地形図に加えて、1：500、1：200などという超大縮尺の地形図によって表示されつつある。花崎城（埼玉県加須市）では実に1：100、

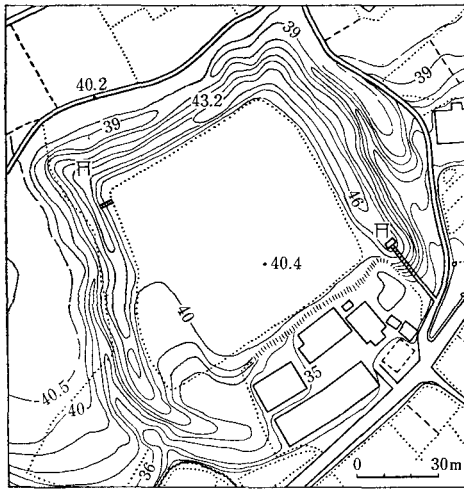


図4 土塁・堀が等高線からよく読める青鳥城本丸 小室栄『武蔵野の城館址』(KK名著出版, 1984) P. 83

等高線間隔10cmまたは5cm補助曲線からなる地形図で、堀の実形が描き出されているのである(図13)。

調査対象の城址には、二つの前段階と同じく台地端の城が引続き多い。しかし現段階に入ってからの特徴は、それらに加えて平地の城址に大々的な発掘調査が進んだことである。平地の城は、すでに述べたように土地利用の発達、埋没などが原因で改変されていて、地表だけの計測、観察のみでは原形が捉えにくく、発掘調査をも必要とする対象であるといえよう。

まず台地城を取上げたい。そのうち比較的早期でありながら、土塁・城の形態を画期的な精密さで表示するという高い成果を挙げた埼玉県の二つを指摘したい。その一つ、青鳥城址は東松山市石橋に位置する台地城で、部厚い報告書がすでに昭和49年に出ている。他の一城、菅谷館址は比企郡嵐山町菅谷字城に原形をよくとどめて存在する。青鳥城と同じく台地城である。城の規模は大きく、台地端に本郭(本丸)があり、順次二ノ郭、三ノ郭が配列する。郭を境する堀と土塁の保存はよいが、その形態は1m間隔の精細な等高線を用いた大縮尺地形図を添えた報告書によって示されている。精密な等高線による土塁・堀の表示は、前段階まで多く用い

られてきたけばに比べて数等優ることは多言を要しない。土塁と堀を表示するのに、けばに加えて地形断面図を配するという方法にしても、精密な等高線で表示された菅谷城の地形図には到底及ぶまい(図4・5)。

西ヶ谷恭弘とその同志による発掘のうち、台地城に属する茨城県次の2城はすこぶる興味深い。猿島町逆井字城の逆井城は、後世(享保10年)干拓によって消失した大湖(旧飯沼)に臨んでいた台地端にある。城址の発掘は、猿島町教育委員会が純然たる学術調査として上記の専門家に依頼した事業。調査日誌によると昭和56年12月予備調査、57年3月20日から第1回の実測・発掘作業を開始、1週間で早くも幾多の成果を挙げた。私は翌58年3月末、前月出版の堂堂たる第1回報告書の内容に打たれ、冬が明けたばかりの第2回発掘現場を訪ねたのだが、土塁・空堀は原形の保存がよい上、報告書と1:2,000大縮尺地形図との対照でよくつかめた。

この場合、地図なしで現地に立ったのでは、喬木・叢林・下草に覆われた土塁・空堀などの

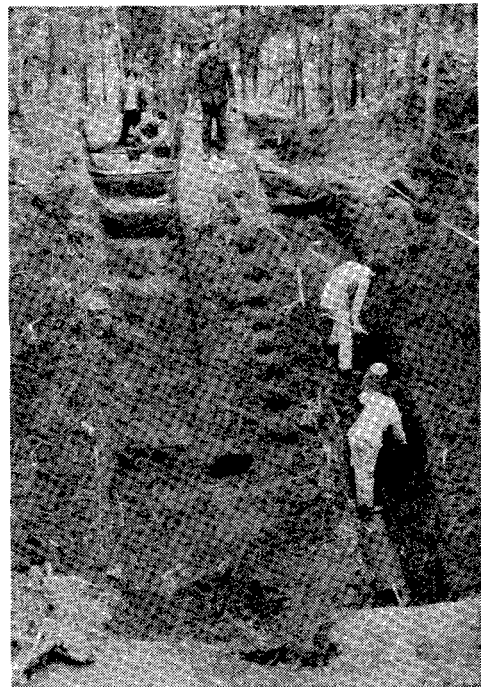


写真1 逆井城の発掘 後方の右の人物は、発掘指揮の西ヶ谷恭弘 龍瀬撮影

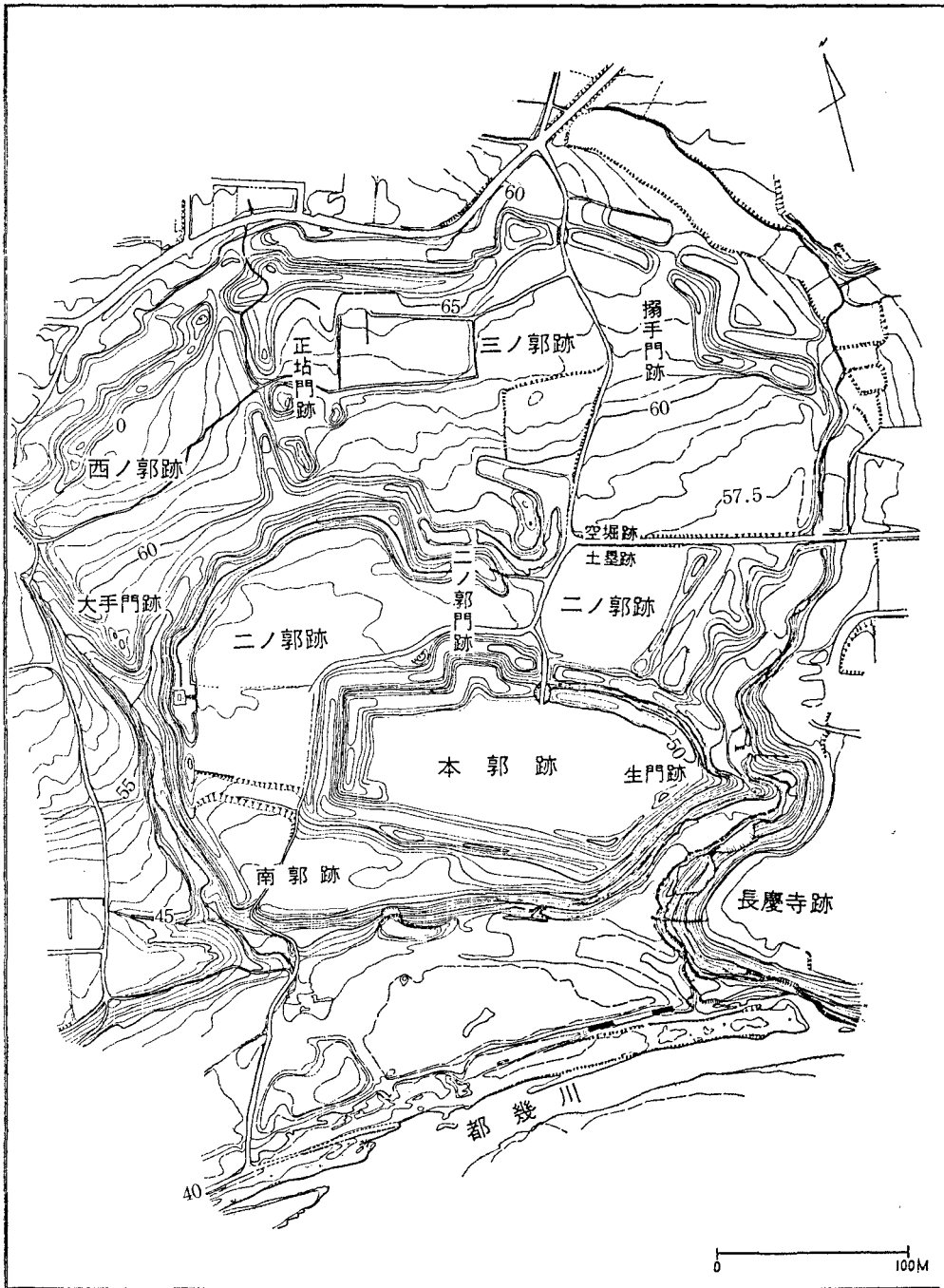


図5 菅谷城 埼玉県教育委員会 菅谷城跡による。

細部までも見極めることは難しかったろう。幸いにも等高線間隔1mなどという優れた大型図があったから、その図を現地と正しく評定しながら逐次移動した。暗くて狭い眼前の空間を、詳密図の助けによって城址全域の中へ位置づけ、正しく、かつ能率的に理解できたのである。西ヶ谷が猿島町教育委員会に調査発掘の第一年次早くも詳密な大型図で土塁・空堀などを細部まで発表するように進言したことは、この史蹟の実態を、専門家・愛好家の双方へ正確に伝えるのに大きく貢献したと思われる。

第2回調査で西ヶ谷と仲間らは、本丸・二の丸間の深い空堀を虎口で大きくまたぐ、木橋の遺構を掘り出して勝ちどきをあげた(写真1)。中世城址の調査を地表に限定せず、発掘でより深部にまでメスを入れるという手法を重視した結果である。これも西ヶ谷らの学者が心血を注ぎ発掘中の大台城³⁰⁾は、県南部鹿島郡牛堀町の孤立台地上にある。大台城は中世の城ではなく、天正19年(1591)、佐竹義宣が行方・鹿島地方の平定に乗出し、文禄4年(1595)から慶長元年(1596)ごろに、小貫頼久に命じて築かせたが、慶長7年(1602)佐竹氏の移封で廃城となったものである。このように在城期間が僅か7カ年と短いこと、つまり長年月間存続して大幅な増改築などをした複合遺跡でない点、私からみての、本城の特に高い学術的価値である。中世城址を見る場合、大台城の外形並びに発掘によって明らかになっ諸事実を整理し、それとの比較で観察すればその特色が一層明確になるに違いないからだ。

大台城の主な特色を西ヶ谷ら城址発掘調査団の報告から、私の関心に従って抜き書きすると次のようになる。1) I曲輪(本丸)から主殿(6間×3間)建築礎石と枯山水庭(池、テラス、貴人を迎える砂盛、踏腕石、あずまやかなる)が発掘された。つまり城は後人の空想や伝承でなく、事実として存在した。2) 主殿の礎石材料の一部に、前時代、他の場所で使用されていた墓石(五輪塔と石塔)が再使用されている。3) 戦国末期の優れた築城技術が結集さ

れている。例えば土塁上の堀は屏風折れ(写真2)。4) 大規模な城門、廊下橋が存在した。5) 天守に当たる櫓跡が確認された。6) 永楽銭、古瀬戸陶片、渡来磁器、鉄砲玉、鉄くぎ、砥石など多数出土。

私が大台城³¹⁾に接した昭和59年1月以降も発掘が続き、さまざまな発見があるのだが、ここでは次の2点だけ付言することにする。1) 大台城には高い学術的価値があるのだから、その内容を後世に伝えるべきである。発掘すべき部分とそのまま保存することが望ましい部分との区分は、その道の専門家の意見を大幅に取り入れてほしい。すでに文化庁も種々の助言と指導を行っているようである。2) 私が強く感じたのは、この地図についてである。それは全周を取巻く高い土塁の本丸が、既刊の地形図からは発見できないという点である。これほど保存のよい土塁が、陸測1:5万図、国土地理院1:5万、1:2.5万のいずれにも記入されていないし、城名はもちろん城址記号もないのである。全国的にみてもあるいは関東地方の他の城址と比べても、バランスを欠いている(図6)。

もう一つ指摘したいのは、牛堀町役場発行の1:2,500地形図にも城址の記入が全くないだけでなく、城をのせる台地の描き方が大きく誤っている点である。それは多言するよりも、その地図(図7)と空中写真(写真3)を見比べて頂ければ明らかである。城内は平らであって、図7のように尖ってはいない。この地図の測量会社は、次の機会にはぜひ十分吟味の上改訂して頂きたい。ここで強調しておきたいのは、誤描の要因は地図作製者の能力の故ではなく、地図の局部についてもその正誤、表現の適否を真剣に見守っている者、つまり地図の利用者がいることを忘却していたためであろう。

このようにいいきったが、大台城址の発掘作業の開始前、町役場が詳密な大縮尺地図を作製してくれていたことの功績は大きい。また大台城本丸以外の土地の表現は、すべて適切であることを測量会社の名誉のために付記しておきたい。

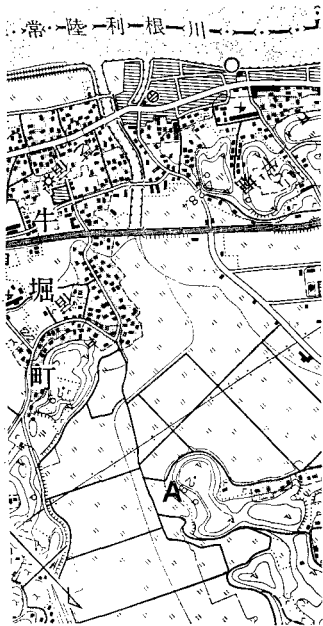


図6 牛堀町大台城
Aは本丸 1:2,5万
昭和56年「潮来」

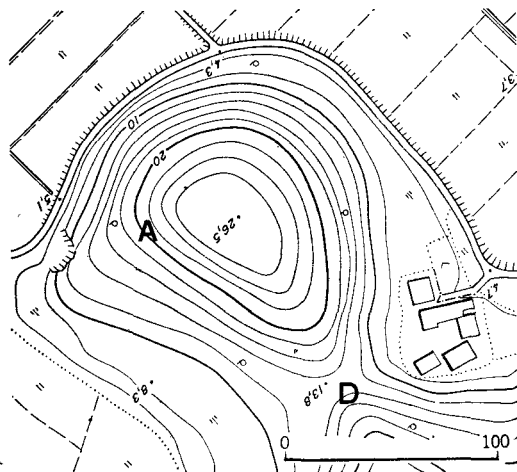


図7 大台城本丸の地形
1:2,500 昭和50年国際航業KK調製
牛堀都市計画図(10分の7に縮小)
等高線間隔2m。Aは写真2の位置,
Dは二の丸への橋位置。地図は
写真3との対照のため方向が逆。



写真2 大台城本丸の土塁。西ヶ谷恭弘提供

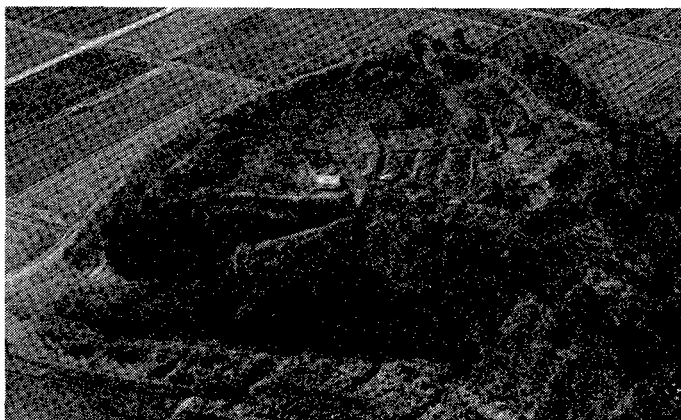


写真3 大台城址本丸全景 西ヶ谷恭弘提供

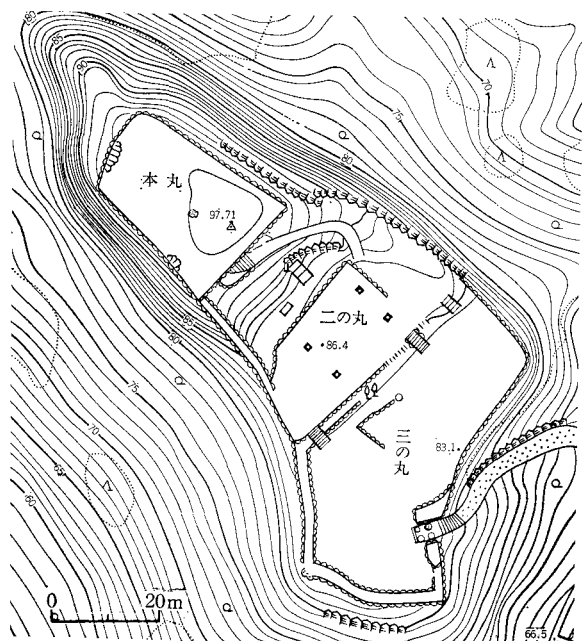


図8 沖縄勝連城 勝連町教育委員会 KKそして『地図の風景—鹿児島・沖縄編』

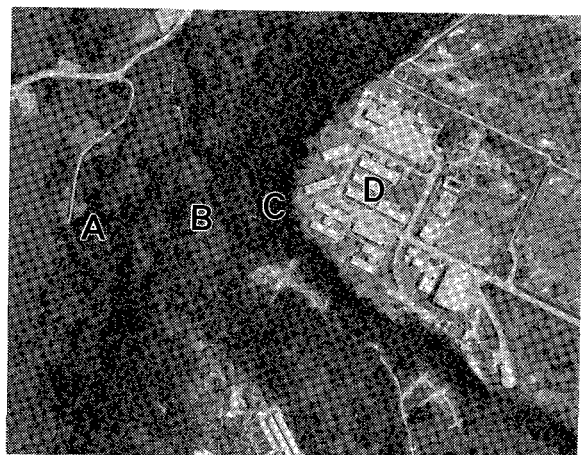


写真4 八重瀬グスク付近 国土地理院C OK-77-1 C64A-10

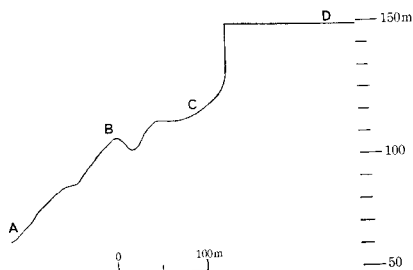


図9 八重瀬グスク付近地形断面図 東風平町教育委員会1:1,000地図より籠瀬作製

城館の位置に台地端が選ばれた最大の理由は、多くの場合崖の示す高い防御力である。このことは諸条件が大きく違う沖縄島のグスク(城と同義語ではないが、城としておく)についてもほぼ当てはまる。その場合崖の防御力は崖の岩質、その植生の如何が大きく影響するほか、地形図の等高線にはっきり表われる崖の比高並びに斜面勾配が明確に示してくれる。隆起珊瑚礁の石灰岩は多くは急斜面を表し、時には垂直またはそれに近い形をとる。図8は石灰岩の露岩からなる急崖上に残る勝連グスク(城)である。心を打つのは勝連村教育委員会が、豊かとは思えない財政の中で等高線間隔1m、縮尺1:1,000の精密で本格的な大縮尺地形図を世におくられている点である。勝連城はほんの一例であって、そのほか、北帰仁城・座喜味城なども1:1,000および1:200という超縮尺の精密な地形図によって、石塁を巡らす城の地形を精しく公表しているのである。

沖縄島南端に近い東風平町の八重瀬グスクは台地城郭の一つである。ただしグスクの位置は、中世城郭あるいは上述の沖縄の諸グスク(城)の地形利用と違い、図9のDの平坦な石灰岩の台地端ではなく、急崖下にある。そこはまた下方にも高い急崖を持つ、つまりこのグスクは上方と下方に石灰岩の急崖を持っているのである。それらの細部は東風平町教育委員会発行の精密な超縮尺地形図によって極めて明瞭である。

時代は離れるが、西日本の古代の城あるいは朝鮮式山城の一つ、総社市の鬼ノ城は比高300m内外の高い崖地を巡らす隆起準平原性の高原にある。それら地形の細部は、総社市が作製した1m間隔の等高線からなる1:1,000の大版の地形図によって知ることができる。この大縮尺地図には城地をぐるりと取巻く長大な石

塁が、高原面と崖との傾斜変換線に沿い、地形利用の巧みさをよく見せている。

IV 城址の発掘・計測と超大縮尺地形図による表示の向上（その2）

次に述べるのは、平地城館の発掘成果を見事に表示した超大縮尺地形図についてである。平地城館では、かつて存在したはずの土塁・堀などの地表の構造物がほとんど姿を消して、調査対象は主として地中に埋まっているはずの遺物・遺跡である。それだけにその実体を明らかにするには多大の困難が伴う。今まさにそれらの困難が克服される段階に達し、各地で平地城館が³⁵⁾つぎつぎに発掘されつつあるのである。それらのうち3例について略記してみたい。

葛西城³⁶⁾は東京都葛飾区青戸に残る15世紀に築かれた平城である。葛西城は環状7号線道路の建設に際して昭和47年から5か年をかけて調査されたとき検出された。土塁が発見されなかったのは後世の土地改変の結果と解されている。おびたしく出土した遺物の種類から中世城館の存在がいっそう確実になった。位置は利根川（現在中川）右岸の微高地で、江戸（東京）湾岸の沖積層からなる三角州上である。水田ならびに畑の適地である上、江戸の中心部とも近いため、城地は大幅に変形したと思われる。

難波田城³⁷⁾は荒川下流部の自然堤防の同じく微高地につくられた中世城館である。はじめてこの城址を訪ねた昭和11年（1936）の印象では、広く連なる水田面から1~2m高まった、ごく普通の畑地でしかなく、空堀などは全く発見できなかった。私の目には、新編武蔵風土記稿の記事や『埼玉県史』などに大型の城館として記され、史上有名な戦闘も行われていたこととは極めて不釣合にうつった。昭和40年代に再び訪ねてみたが、そこを城址と説明する記念碑がごく普通の農家と畑の間にぽつんと立つだけで、今回もまたほかには何も目に入らなかった。し

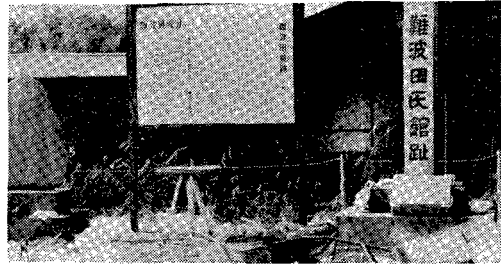


写真5 発掘作業中の難波田城址 昭和59年 龍瀬撮影

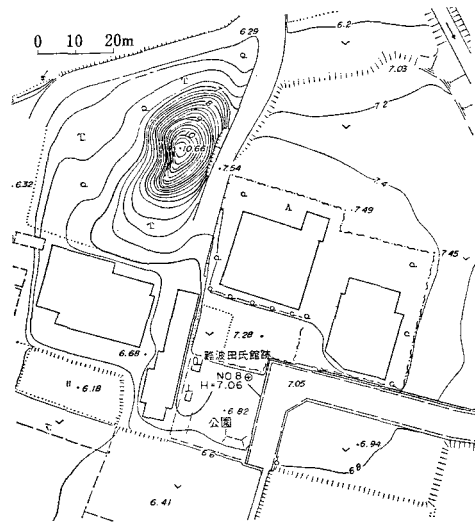


図10 難波田城の中心 突起物は土塁の残片 1:500×0.5 富士見市教育委員会

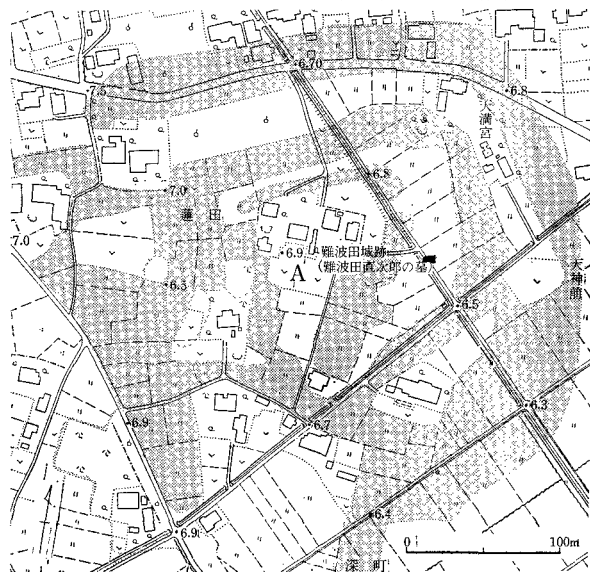


図11 難波田城 アミ地は城の水堀、太破線は土塁残片 富士見市教育委員会資料（未発表）小室栄一『武蔵野の城館址』（KK名著出版、1984）P. 89

かし中世の城は、大城として著名であっても、平地の城では可視的遺跡に乏しいことを経験からわかりかけていたので、遺跡の状態におおむね納得した。私は記念碑から離れ、そこを取巻く畑地、さらに畑地を取巻く水田の帯を、城の郭および水堀と仮定して眺めた。昭和59年2月、12月の何回目かの現地踏査時は、地元富士見市教育委員会が小出輝雄・荒井幹夫両技官の指導で、多数の人々により難波田城址を発掘中であったが、この時私は幾つかの経験をした。そのうちの2つを略記したい。

1) かつての日一巡して城の本丸・二の丸、水堀などとした軽い思いつきが、今回は確定にまで高まったこと。でも不安もあったので、すでに精査を終っている小出技官の後ろに従って城地の全域を時間をかけて巡回し、その説明を聞くことにした。一巡のあと私は御多忙なことを承知で、小出技官に富士見市作製1:2,500地形図に技官の調査結果を記入してほしいと願った。図11はそれである。細かい等高線の記入された1:2,500大縮尺地形図に城のプラン(縄張)をこのように記入するには、遺構の把握が十分である上に、地形図の利用に習熟していなくてはならない。それに大縮尺地形図へこのように書き込まれた城郭図は、調査結果を正確に利用者へ伝達できる絶大な利益がある。ところで私は教育委員会の好意によって、城址に向かう前、既刊の報告書とともに頂いた上述の1:2,500地形図との対照で、現地を調査することができたのである。この地図がなかったら、二の丸・三の丸、水堀についての前回の予想を確信に導いたり、さらに小出技官の説明を十分に理解するなどということも困難だったろう。

難波田城の発掘は学術調査のため、昭和55年9月から市教育委員会の手で開始され、56年からすでに3冊の報告書を公表し、学界に寄与している。もう一つ寄与しているのが、この調査用に作製された特別の地図である。それは等高線間隔20cm、縮尺1:200という驚くべき内容の異例の地図である。図10はその一部を縮小したもので、突起の小丘は現存する土塁片である。

このような表示があれば遠方の研究者に現地を踏む手間を省かせることができ、学界への高い貢献となる。

2) 難波田城について特記したいもう一つは、以上のこととは違い、もっぱら地下の事実についてである。それは今回の巡歴時、作業者の手で掘り出されていた水堀の側壁が垂直に近いのに、その側壁が素掘であったこと。この城は自然堤防のヘリの部分に掘り込まれている。水堀の地層は荒川・入間川系下流の自然堤防の砂泥である。従ってそこは軟弱な地層であって崩れ易く、いわんや中世以降の長い時間、側壁はそのままでは保てないはずであると考えるのが常識である。軟弱なはずの下流型自然堤防の地層についての認識を変える必要があるそうである。いずれにしても難波田城の築城技術者は、後世自然堤防と呼ばれるこの地層に、急な側壁を掘込んでも崩落しないことを知っていたに違いない。ほぼ同じことは次に挙げる花崎城の水堀の側壁でも観取される。^{38), 39)}

その花崎城とは、埼玉県加須市、東武線花崎駅に近い中世城址である。城址の位置について特筆したいのは、そこが水田面から僅か1~2m高の低所だという点である。昭和30年代の報告で、城址の位置を自然堤防、ただしその高所ではなく、後背湿地ベリの低所として略述したのは、その地表が河川堆積物の砂泥であることを確認したからである。その後出版された国土地理院の土地条件図の表示でも、花崎の位置は同じく自然堤防であったから、自分の観察に疑いを抱かず年月が流れた。しかし私の観察も、前記土地条件図も、その部分に関する限り誤りであった。地形の分類としては間違っていなかったものの中世城館の立地条件という視点からは不適當であった。詳述すると次のようなことである。

花崎城址の地表は、地盤高では低湿地に接する微高地ベリ、堆積物でいえば厚さは僅か1~2mに過ぎなくても、河成の土砂であるから、ここを自然堤防とすること自体は誤りではなかった。地形の分類は何よりも地表の形状による

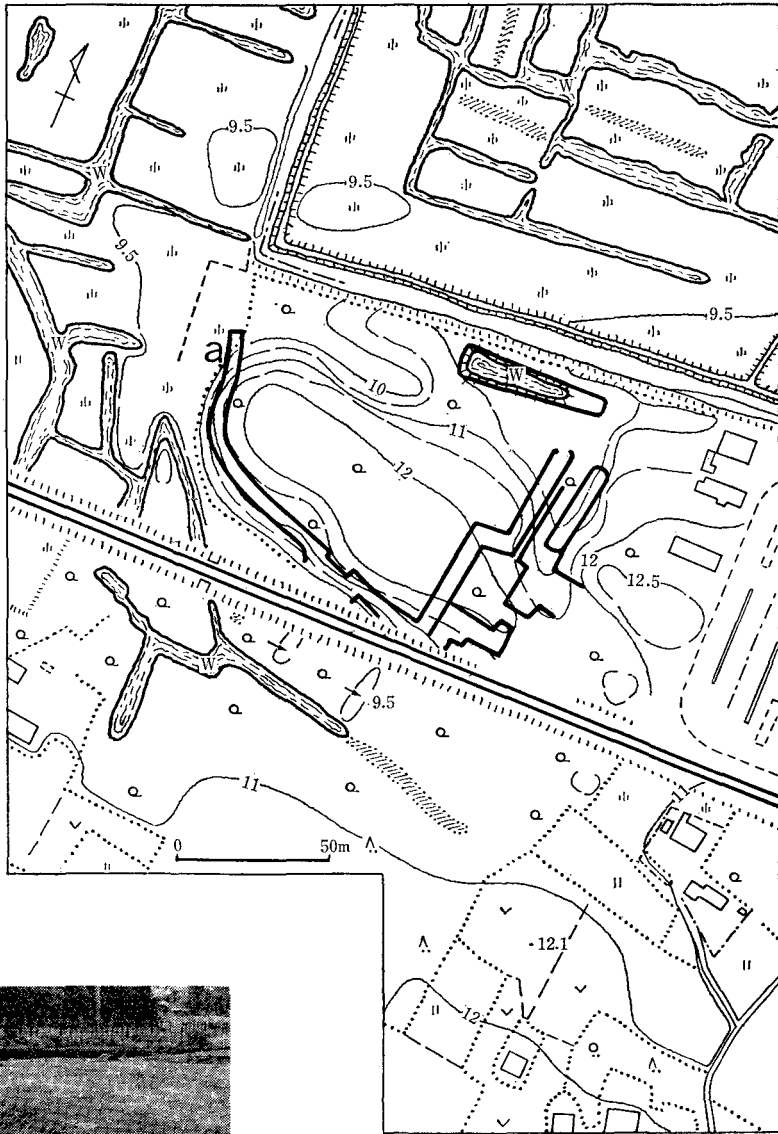


写真6 花崎城の水堀（堀障子）西ヶ谷恭弘提供

図12 花崎城の地形
 加須市 1 : 2,500地形図に、
 同市教育委員会「花崎遺跡」
 の堀を籠瀬の責任で重ねた。
 小室栄一『武蔵野の城館跡』
 (KK名著出版, 1984) p. 94

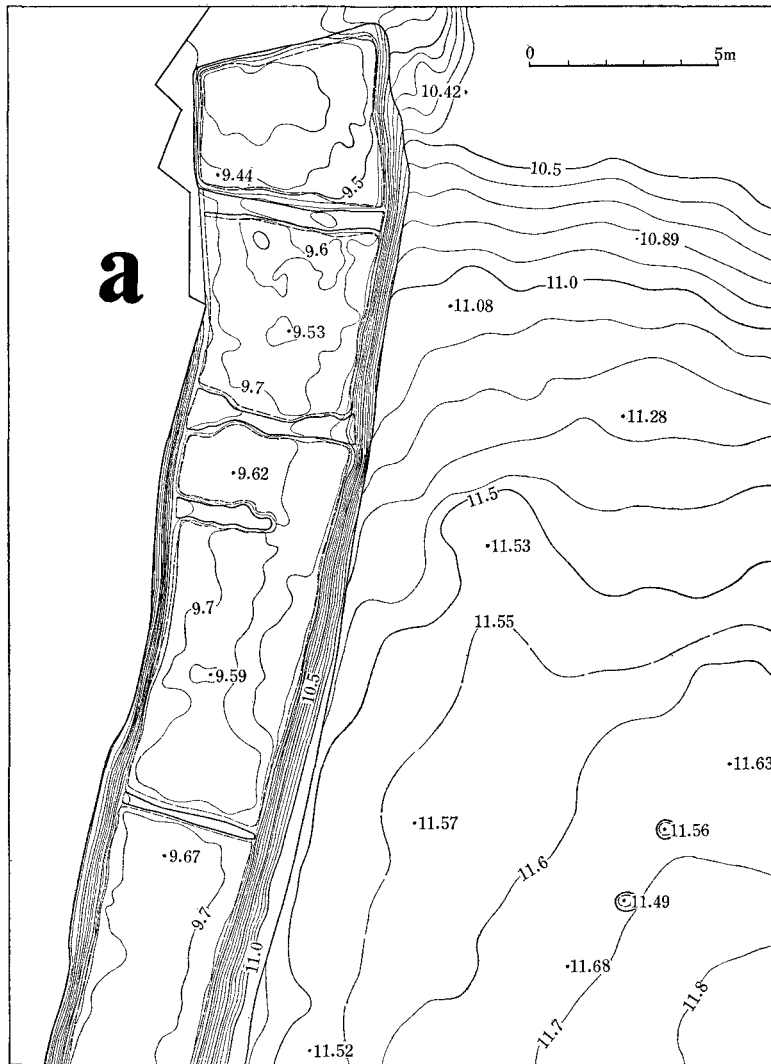


図13 発掘された花崎城の水堀の北西部，図12のa点
加須市教育委員会1：100×0.5 小室栄一『武蔵野の城館址』（KK名著出版，1984）p. 95 籠瀬論文

のであり，現在が対象である。表層下の次層や過去の事実因るのではない。

昭和52年日本住宅公団（現住宅都市整備公団）が花崎駅北部の土地区画整理事業を計画したが，かねて城址とされていたため，55年8月2日～12月25日，56年3月2日～10月4日にわたる発掘調査を実施した。この調査に若い地形学者平井幸弘⁴⁰⁾（東大大学院生）が参加したが，その結果，平井は薄層の下に横たわる関東ローム層に焦点を置き，沖積層下に埋没した関東ローム台

地という意味で，花崎城址付近を埋没台地あるいは台地性微高地としたのである。なお国土地理院の土地条件図「鴻巣」では，昭和55年版からは段丘・台地のうち下位面に改めていることは周知のとおりである。

さて図13によれば，堀の側壁は急峻であるのに保存はよく，もちろん石垣もない。堀の側壁が崩壊していないことの説明には，ここの地盤が軟弱な自然堤防であるよりも，埋没台地であることのほうがわれわれを納得させてくれる。

以上の小論は昭和59年4月22日、歴史地理学会でスライドを用いた報告を骨子としたものである。要点を摘記するとともに、若干の補足を行うと次のようになる。

中世城館のうち台地端のものは、保存がよい点からも戦前から多くの平面図が作製された。昭和30年前後には、小室栄一が、計測による大縮尺地形図で城址の細部を表示するという手法を用いて、今日見る大縮尺地形図による表示時代を発足させた。

発掘調査の結果を、大縮尺ないし超大縮尺地形図で表示するという現段階は、それより遅れてスタートした。

中世城址の調査研究には、地理学からも協力担当する面が多いが⁴¹⁾、ここではそれらの一端としての大縮尺地形図を、具体例を頭におきながら述べてみた。

〔注〕

- 1) 佐藤興治 (1981)「朝鮮古代の山城」(『日本城郭大系別巻Ⅰ』, 新人物往来社)
- 2) 小田富士雄編 (1983)『北九州瀬戸内の古代山城(韓国の古代山城を含む)』KK名著出版
- 3) 籠瀬良明 (1982)「沖縄の城にからむ二つの疑点」地理誌叢24-1, 日本大学文学部地理学教室
- 4) 同 (1980)「台地端の城(英・独・仏の一部)」地図の友22-819, 日本地図協会
- 5) 同 (1984)「大縮尺地形図による中世城址の表示」(小室栄一編著『武蔵野の城館址—日本城郭史研究叢書第3巻』KK名著出版)
- 6) 同 (1978)「伊那盆地の一古城」地理23-4
- 7) 同 (1941)「戦国時代に於ける武蔵の台地城郭に就いて」日大三中研究年報6
- 8) 同 (1948)「武蔵における中世城郭の分布」地理学評論21-8~10
- 9) 小室栄一 (1959)「中世豪族館城の研究—関東地方に於ける館址の実測とその復原試論」日本学士院紀要第17-1
- 10) 同 (1965)「中世城郭の研究1」日本学士院紀要23-3 (未見)
- 11) 同 (1966)「中世城郭の研究2」日本学士院紀要24-1 (未見)
- 12) 同 (1965)『中世城郭の研究—関東地方に於ける築城遺構の実測調査とその諸問題』人物往来社
- 13) 同 (1984)「中世城郭の諸研究」(『日本城郭史研究叢書3 武蔵野の城館址』KK名著出版)
- 14) 籠瀬良明 (1968)「中世城館の調査と豪族屋敷村」地理学評論41-1
- 15) 同 (1980)「鬼怒川をめぐらす天険の古城飛山」(『地図の風景 関東編Ⅱ』KKそしえて)
- 16) 同 (1979)「多摩の小山田城」地理24-10
- 17) 小室栄一編著 (1984)『武蔵野の城館址 日本城郭史研究叢書第3巻』KK名著出版(小机城・鉢形城・滝山城・八王子城・加納城・菅谷城・青鳥城などを含む)
- 18) 霊山町教育委員会 (1981)『史跡及び名勝霊山』保存管理計画書
- 19) 『埼玉の館城跡』1968, 埼玉県教育委員会
- 20) 『東京都遺跡地図』1974, 都教育庁文化課
- 21) 『全国遺跡地図』1976~1977, 文化庁文化財保護部
- 22) 『長野県の中世城館跡』1983, 長野県教育委員会
- 23) 『深沢遺跡・小田野城跡』1981, 同調査会
- 24) 『越畑城跡 埼玉県遺跡調査報告書 第20集』1979, 埼玉県教育委員会
- 25) 『小坂城跡』1979, 茨城県牛久町小坂城跡発掘調査会
- 26) 『青鳥城跡』1974, 埼玉県教育委員会
- 27) 『菅谷城跡』1977, 埼玉県教育委員会
- 28) 『下総国逆井城址』1983, 茨城県猿島町教育委員会
- 29) 籠瀬良明 (1984)「茨城県飯沼の享保干拓時の湖岸線」東北地理35-4
- 30) 大台城址発掘調査団 (1984)『大台城址発掘調査現地説明会資料』
- 31) 籠瀬良明 (1984)「茨城県牛堀町の大台城」地図ニュースNo. 141
- 32) 『ぐすく』1983, 沖縄県教育委員会
- 33) 『糸満市の遺跡』1981, 糸満市教育委員会
- 34) 『八重瀬グスク調査略報』1979, 沖縄県東風平村教育委員会
- 35) 『私市城跡』1981, 埼玉県騎西町教育委員会
- 36) 『青戸・葛西城址調査報告Ⅲ』1975, 葛西城址調査会
- 37) 『難波田氏館址発掘調査報告書』3冊, 1981~

1983, 埼玉県富士見市教育委員会
38) 『花崎遺跡』1982, 加須市遺跡調査会
39) 西ヶ谷恭弘 (1983) 「花崎城跡の発掘」
(『中世の考古学』, KK名著出版)

40) 平井幸弘 (1983) 「関東平野中央部における沖積
低地の地形発達」地理学評論56—10
41) 籠瀬良明 (1957) 「中世の館と地形」(『現代地理
講座 I』 河出書房)

The Contributions of Large-Scale Maps to the Study of Mediaeval Castles in Japan

Yoshiaki KAGOSE

The writer clarifies the various scales on which maps used in the study of castles built in the Middle Ages were drawn. His paper is summarised as follows:

Up till the early 1940's castle researchers like Masao Toba had studied castles utilising maps drawn mainly on a scale of 1 : 50,000. The fruits of the studies of this period were gathered into a series of sixteen volumes under the title "Collected Works on the Castles of Japan" (*Nihon Jokaku Zenshu*).

From the middle of the 1950's up till the present, researchers have worked in the field measuring moats and dykes of castles, and have depicted them on large-scale topographical maps. Between the years 1960-70, maps on the scale of 1 : 2,500 commenced to be published by the Geographical Survey Institute and surveying companies. Researchers utilised these maps when investigating castles and produced skilfully drawn plans of castle constructions. Numerous reports were published, the best of which were incorporated into a series of twenty volumes named "An Outline of Japanese Castles" (*Nihon Jokaku Taikei*) published by Shin-Jinbutsu-Oraisha.

Since the 1970's, it has become common for researchers to conduct excavations at castle sites, particularly those found in the alluvial lowlands. Their findings, which are consequently published, are depicted on maps drawn on large scales such as 1 : 1,000, 1 : 500, 1 : 200, and 1 : 100, with very minute contours.